The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	三巻本『枕草子』の和歌 : 定子と清少納言の交流を中心に
Author(s)	佐藤, 雅代
Citation	詞林. 2004, 35, p. 90-99
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67518
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

三巻本『枕草子』の和歌

―定子と清少納言の交流を中心に―

佐藤　雅代

はじめに

三巻本『枕草子』には、和歌三十三首と連歌六首を含む二十五章段があることが知られる。[1]

章段	和歌・（連歌）	詠者　他
二一一段	二首	清少納言、道隆の古歌利用
三二一段	一首	清少納言の返歌
八〇段	二首	清少納言の贈歌
八三段	三首	斎院選子の贈歌、清少納言の歌、尼の歌
八六段	二首	実方の贈歌、清少納言返歌代作
九五段	二首（二首）（二首）	定子と清少納言の贈答
一〇二段		公任と清少納言の贈答
一二六段	一首	清少納言の心中詠
一三〇段	二首	行成と清少納言の贈答
一三二段	一首	一条天皇（＊定子の匿名贈歌）
一七五段	一首	兵衛の奏歌
一七七段	二首	定子と清少納言の贈答
二一二段	（二首）	定子と清少納言の贈答
二一三段	一首	定子の歌
二二四段	一首	定子の贈歌
二二五段	一首	定子の贈歌
二二七段	一首	蟻通明神の歌
二五九段	一首	清少納言の返歌
二八二段	三首	清少納言の心中詠および、定子との贈答歌
二八七段	一首	道命の述懐歌
二八八段	一首	道綱の母の歌
二九四段	一首	清少納言の贈歌
二九六段	一首	清少納言の返歌
二九七段	一首	清少納言の返歌
二九八段	一首	清少納言の返歌

このうち清少納言によるものは、和歌十六首、連歌三首、定子によるものは、和歌七首、連歌二首で、清少納言と定子の和歌を合わせると二十三首にのぼる。

従来『枕草子』と和歌との関わりについては、定子サロンにおける和歌のあり方[2]や、清少納言の和歌観、詠作態度を問題とするもの[3]、また「前期章段」と「後期章段」の方法的差異を和歌的言語の視座から捉えようとするものなど[4]、さまざまな角度から論じられてきた。本稿では、定子と清少納言の交流を中心に三巻本『枕草子』における和歌のあり方の一側面を探ってみたい。

一

三巻本『枕草子』の中で、史実年時を推定できる章段のうち、定子と清少納言の和歌による交流を、最初に記すのは次の章段である。

物など仰せられて、「われをば思ふや」と問はせたまふ。御いらへに、「いかがは」と啓するに合はせて、台盤所の方に、鼻をいと高うひたれば、「あな心憂。そら言を言ふなりけり。よしよし」とて、奥へ入らせたまひぬ。「いかでかそら言にはあらむ。よろしうだに思ひきこえさすべき事かは。あさましう、鼻こそそら言はしけれ」と思ふ。「さても誰か、かくにくきわざはしつらむ。おほかた心づきなしとおぼゆれば、さるをりも押しひしぎつつあるものを、まいていみじ、にくし」と思へど、まだうひうひしければ、ともかくもえ啓し返さで、明けぬればおりたるすなはち、浅緑なる薄様に、艶なる文を「これ」とて来たる、あけて見れば、

「いかにしていかに知らましいつはりの空にただすの神なかりせば

となむ、御けしきは」とあるに、めでたくも、くちをしうも思ひ乱るるにも、なほ昨夜の人ぞ、ねたくにくまほしき。

「薄さ濃さそれにもよらむはなゆゑに憂き身のほどを見るぞわびしき

なほこればかり啓しなほさせたまへ。式の神おのづから。いとかしこし」とて、まゐらせて後にも、「うたて、をりしくもなどてさはありけむ」と、いと嘆かし。

（一七七段）[5]

この章段は、正暦四年に清少納言が定子のもとに初宮仕えをした折りの様子や胸中を鮮明に記している[6]。「われをば思ふや」という定子の問いに対して、応答しようとした清少納言にとって、第三者の嘘は、定子との間に気まずい雰囲気をもたらしてしまう。この後に定子から贈られた「いかにして」の歌に対して、清少納言は、定子から信頼されぬ我が身を「憂き身」と規定し、「わびし」と嘆く心情を「薄さ濃さ」の歌に託して詠んでいる。

大洋和俊氏は、この章段における清少納言の和歌は、「憂き身」を「見る」もう一人の〈私〉が存在するとし、宮仕えの最初期に定子の虚言発言により、清少納言は「わびし」の意識を抱くようになったと指摘している。[7]

また、この章段については「ほかならぬ女房清少納言の初宮仕えを描きつつ主従の『めでたき』関係成立を示す段―枕草子の始発ともいいうる段」という指摘もある。[8]

清少納言にとって、宮仕えにおける定子への初めての返事が、「薄さ濃さ」の歌であった。定子と自分の「めでたき」関係成立を語ることがこの章段の眼目であったならば、章段最後の言葉が「いと嘆かし」であり、清少納言の返歌に「憂き身のほどを見るぞわびしき」とあることをどのように考えれば良いだろうか。

清少納言は、初宮仕えにおける我が身を「憂き身」と捉え、「わびし」と認識していたのである。「薄さ濃さ」の歌は、定子との「めでたき」関係成立を示すというより、定子との心的な距離を暗示するものとして機能していたとみるべきであろう。[9]

二

次に挙げる章段も、清少納言の初宮仕えの後、まだ間もない頃のこととして、定子との和歌贈答を記す章段である。

そのころ、また同じ物忌しに、さやうの所に出で来るに、二日といふ日の昼つ方、いとつれづれまさりて、ただ今もまゐりぬべき心地するほどにしも、仰せ言のあれば、いとうれしくて見る。浅緑の紙に、宰相の君いとをかしげに書いたまへり。

「いかにして過ぎにし方を過ぐしけむ暮らしわづらふ昨日今日かな[10]

となむ。わたくしには、今日しも千歳の心地するに、暁にはとく」とあり。この君ののたまひたらむだにをかしかべきに、まして仰せ言のさまは、おろかならぬ心地すれば、

「雲の上も暮らしかねける春の日を所からともながめつるかな

わたくしには、今宵のほども少将にやなりはべらむとすらむ」とて、暁にまゐりたれば、「昨日の返し『かねける』、いとにくし。いみじうそしりき」と仰せらるる、いとわびし。まことにさる事なり。（二八二段）

この章段では、清少納言の和歌をめぐって、定子から発せられた言葉を問題にしている。定子の言葉は「『かねける』いと憎し。いみじうそしりき」という非難の言であった。

つまり和歌の贈答による定子と清少納言の交流は断ち切られていることが知られるのである。この章段の末尾にも「いとわびし」とあり、清少納言が先の一七七段と同様に、定子との心的な距離を自覚した章段と言えるだろう。

また、この章段の末尾は「まことにさる事なり。[11]」で結ばれており、定子に会えないでいる清少納言の寂しい思いを詠んだ和歌が、定子の心に届かなかったことへの諦めにも似た落胆が語られているのである。

三

次に、定子と清少納言の信頼関係が、連歌のやり取りによって保証された章段について考えてみたい。

細殿にびんなき人なむ、暁に傘さして出でけると言ひ出でたるを、よく聞けば、わが上なりけり。地下などいひても、目やすく人にゆるさるばかりの人にもあらざなるを、「あやしの事や」と思ふほどに、うへより御文持て来て、「返事ただいま」と仰せられたり。何事にかと見れば、大傘のかたをかきて、人は見えず、ただ手の限りをとらへさせて、下に、

山の端明けし朝より

と書かせたまへり。なほはかなき事にても、ただめでたくのみおぼえさせたまふに、はづかしく、心づきなき事は、いかでか御覧ぜられじと思ふに、かかるそら言の出で来る、苦しけれど、をかしくて、こと紙に、雨をいみじう降らせて、下に、

「ならぬ名の立ちにけるかな

さてや、濡れ衣にはなりはべらむ」

と啓したれば、右近の内侍などに語らせたまひて、笑はせたまひけり。

（二二二段）

この章段は、清少納言のもとに通う男性をめぐる噂について語る章段である。[12]定子と清少納言の連歌が、『拾遺和歌集』に見える藤原義孝の歌「あやしくも我が濡れ衣を着たるかな三笠の山を人に借られて」（巻一八・雑賀・一一九一）を念頭に置いていることは言うまでもない。

定子のもとから、大傘をさした手だけの人物を描く絵とともに「山の端明けし朝より」という歌の上句が届けられるが、初句はなかった。噂の虚偽を証す定子に、清少納言は、別の紙に雨をたくさん降らせて、その絵の下に「ならぬ名の立ちにけるかな」と書き、「さてや、濡れ衣になりはべらむ」と返している。

絵と文字を併用してきた定子の趣向を清少納言は、「なほ、はかなき事にても、ただめでたくのみおぼえさせたまふに」と記す。「はかなき事」にも鋭敏に反応し、感嘆する定子を讃美するとともに、そのような定子には「はづかしく、心づきなき事」は絶対に見せたくないと思い、「苦しけれど、をかしくて」と苦慮する清少納言の思惟が語られている。定子との信頼関係を連歌の贈答によって確認するという方法が、一つの達成を遂げたかに見えるこの章段は、先の一七七段や二二八段の和歌のあり方とは明らかに異なっている。

四

三巻本『枕草子』の二二三段、二二四段、二二五段は定子の和歌を記す章段である。[13] まず、二二三段における和歌の機能について考えてみたい。

三条の宮におはしますころ、五日の菖蒲の輿などもてまゐらせなどす。若き人々、御匣殿など薬玉して、姫宮、若宮につけてたてまつらせたまふ。いとをかしき薬玉どもほかよりまゐらせたるに、青ざしといふ物を、持て来たるを、青き薄様を、艶なる硯の蓋に敷きて、「これ籬越しに候ふ」とてまゐらせたれば、

みな人の花や蝶やといそぐ日もわが心をば君ぞ知りける

この紙の端を引き破らせたまひて書かせたまへる、いとめでたし。（二二三段）

二二三段の史実年時は長保二年五月、懐妊中の定子が、平生昌邸に滞在していた頃のエピソードである。この年の二月二十五日には、道長の長女彰子が中宮となり、定子は皇后と称されるようになっていた。『権記』によれば、五月五日の節句に際して、彰子方には天皇の渡御があったことが記され、その折りの華やかな様子は『栄花物語』巻六に描かれている。史実から見れば、定子最晩年の悲境を背景とする章段でもある。

日記的章段という名称で類別される章段群の中で、中関白道隆の生前の年時（長徳元年四月以前）を史実年時とする章段群を前期章段、それ以降（中関白家没落後）の年時を扱かったものを後期章段と類別した時、章段の背景をなす年時と、章段に内在する叙述の方向性との間には、ある相関関係が認められるように思われる。例えば、前期章段が、盛儀の様や主家の人々の卓越性などに素材を限定し、そこに内在する「めでたさ」や「をかしさ」を場面として提示することで、叙述の方向性を形成していくのに対して、そのような素材が失われてゆく中で、それまで選び取られなかった素材を開拓し、新しい方向性を模索してゆくのが、後期章段のあり方であったと言えよう。

さて、二二三段では、「めでたし」という評語にも注目すべきであろう。岸上慎二氏によれば、前期章段において、定子を讃美する評語としては、容姿、衣装、仰せ、心ばえなど全般にわたって、「めでたし」が用いられ、笑いや機知的な言動に付随しては「をかし」が用いられる傾向にあると言う。[14] 史実から見れば、定子晩年の悲境を背景とするこの章段が、末尾の「めでたし」に向けて、どのような叙述を展開することを意図していたのだろうか。

二二三段に見られる、「青ざし」という青麦の粉で製した菓子は、定子に対する公的な献上品ではなく、「持て来たる」とあることからも、誰かが清少納言に私的に贈ったものであ

り、それを改めて定子に奉ったと見るべきだろう。「これ籬越しに候ふ」の「ませごし」とは、「ませごしに麦はむ駒のはるばるに及ばぬ恋も我はするかな」（古今和歌六帖・一四二七）の第一句からの転用である。麦菓子であるから「麦はむ」の第二句をきかせて、「お召し上がり下さい」の意を伝え、更に第三句以下に「お体を案じております」の意を託している。

定子の和歌をめぐっては、解釈が二分している。古注以来、彰子方の繁栄の陰で一条天皇と隔てられた定子の心境を述べたもので、『古今和歌六帖』の歌の下句「及ばぬ恋も我はするかな」の心をこめたものとする解釈が一般的だが、「青ざし」という庶民的で野性的なイメージを持つ品を献上した清少納言に対して、その「趣向を愛でた」和歌として、この章段に置かれたと見ることも可能だろう。

萩谷朴氏は、この章段の締めくくりの評語が「いとめでたし」であることについて、「いとあはれなり」としないのは、清少納言の執筆時の感情がまだそこまで高まっていないのと同時に、自分の思いも及ばなかった六帖の歌の真意の鮮やかな転用に、女人としての皇后への同情よりも、作家としての皇后への賛嘆が先に立ったからであろう、と述べている。[15]

一方、田畑千恵子氏は、「青ざし」の献上が、常に個性的で新しい美を求める定子の美意識にかなったものであったことを伝えようとしたのであり、「めでたし」は、美を解し、その感動を共有することのできる定子への讃美である、という解釈を示している。[16]

また、針本正行氏は、定子の和歌は、中宮定子を悲劇の主人公に仕立て上げ、定子を理解し、敬慕する清少納言像を構築する目的で書き付けられた、としている。[17]

古今六帖の歌の真意の鮮やかな転用をしてみせた定子への賛嘆が「めでたし」であろうという見解や、「めでたし」は、常に個性的で新しい美を求め、その感動を共有することのできる定子への讃美であるという解釈、また、定子と清少納言の二人の行動を讃美するものであるという見解、そのいずれも、この章段の読みの可能性を提示するものと言える。確かに、清少納言が、定子の没落を目の当たりにしている以上、書かれたものの基底に虚構の意識が根強く潜んでいることも認めないわけにはいかない。

清少納言は、この章段において、姫宮、若宮のお召し物に薬玉をつけるという情景を簡略に記している。姫宮は脩子内親王、若宮は敦康親王だが、『枕草子』において、皇子、皇女がともに語られるのはこの章段だけとなっており、清少納言が、今上帝の第一皇子、皇女とともにある、誇り高い定子像を描こうとしたと見ることもできる。

しかし、例えどのような定子像であれ、定子との信頼関係を語れることが、清少納言にとって「めでたし」であったと考えられるのである。つまり、「わが心をば君ぞ知りける」

という定子の和歌は、清少納言に対する定子の絶対的な信頼を語るために機能していると言えよう。

五

御乳母の大輔の命婦、日向へくだるに、給はする扇どもの中に、片つ方は、日いとうららかにさしたる、田舎の館などおほくして、いま片つ方は、京のさるべき所にて、雨いみじう降りたるに、

あかねさす日に向かひても思ひ出よ都は晴れぬながめすらむと

御手にて書かせたまへる、いみじうあはれなり。さる君を見おきたてまつりてこそ、え行くまじけれ。(二二四段)

二二四段の史実年時については、萩谷朴氏による「長保二年、三条宮においての出来事」との指摘がある。[18] 定子の和歌について、清少納言は「いみじうあはれなり」と規定している。「あかねさす」の和歌を、清少納言がどのような経緯で手に入れたのかは書かれておらず、和歌を贈られた御乳母の大輔の命婦から、どのような返歌があったのか、あるいはなかったのかについても語られることはない。ここでは、和歌の贈答をしたであろう当事者同士のやりとりに言及することなく、和歌を贈った一方の様子のみを記すことに終始しているのである。この章段における定子の和歌は、「さる君を見おきたてまつりてこそ、え行くまじけれ」という清少納言の決意を語る契機として機能しているのである。

清水に籠りたりしに、わざと御使して給はせたりしに、唐の紙の赤みたるに、さうにて、

「山近き入相の鐘の声ごとに恋ふる心のかずは知るらむ

ものを、こよなの長居や」とぞ書かせ給へる。

紙などのなめげにならぬも取り忘れたる旅にて、紫なる蓮の花びらに描きてまゐらす。(二二五段)

この章段の史実年時は不明であるが、定子の和歌を語る章段であること、定子から贈られた和歌に対する返歌が記されていないことは、先の二二四段と同様である。清水寺に参籠していた清少納言のもとに、定子から和歌が届けられるが、その定子の和歌に対して、清少納言は「紫なる蓮の花びらに書きてまゐらす」と記すものの、返歌したはずの和歌を書きとどめることをしていない。

定子は清水寺参籠中の清少納言の不在を「こよなの長居や」と述べており、清少納言は「山近き」の和歌によって、定子から必要とされている自分を再確認しているのである。言い換えれば、定子の和歌が、清少納言との信頼関係を語るものとして機能しているのであり、この点は先の二二三段と同様である。

結び

清少納言が自らの和歌コンプレックスを語る九五段には、次のような定子とのやり取りが見える。

なれど、歌よむと言はれし末々は、すこし人よりまさりて、『そのをりの歌は、これこそありけれ、さは言へど、それが子なれば』など言はればこそ、かひある心地もしはべらめ。つゆとりわきたる方もなくて、さすがに歌がましう、われはと思へるさまに、最初によみ出ではべらむ、亡き人のためにもいとほしうはべる」とまめやかに啓すれば、笑はせたまひて、「さらば、ただ心にまかせ。われらはよめとも言はじ」とのたまはすれば、「いと心やすくなりはべりぬ。今は歌のこと思ひかけじ」

（九五段）

これに続き、九五段は、庚申の夜が更ける頃、題を出して女房たちに歌を詠ませる場面を語り、その中にあっても和歌を詠まない清少納言自身を描写している。しかし、定子から突然「いささかなる御文」として、「元輔が後と言はるる君しもや今宵の歌にはづれてはをる」という和歌を示されると、清少納言は「をかしき事ぞたぐひなきや」と感じ、即座に「その人の後といはれぬ身なりせば今宵の歌をまづぞよままし」と応じているのである。

この章段の史実年時は、長徳四年五月とするのが一般的であるが[19]、ここには、和歌によるコミュニケーションの達成が語られている。詠歌御免の約束を取り付けたその後に、定子から歌を詠みかけられているにも関わらず、清少納言は返歌することを少しもためらっていない。和歌を詠むことを強要されることはない、という安心感が逆に和歌を詠むことから彼女を自由にしたのであろう。和歌コンプレックスを理解してくれた定子との信頼関係が、真に心の交流を示すような和歌の贈答を可能にしたと言えるだろう。この場面における和歌は、互いの心を確認しあった証として機能しているのである[20]。

ところで、三巻本『枕草子』には、次のような章段が見える。

職におはしますころ、八月十余日の月のあかき夜、右近内侍に琵琶ひかせて、端近くおはします。これかれ物言ひ、笑ひなどするに、廂の柱に寄りかかりて物も言はで候へば、「など、かう音もせぬ。物言へ。さうざうしきに」と仰せらるれば、「ただ秋の月の心を見はべるなり」と申せば、「さも言ひつべし」と仰せらる。（九六段）[21]

この章段も先の九五段と同様に、定子と清少納言の心の交流を語っている。「など、かう音もせぬ。物言へ。さうざうしきに」と言う定子に対して、清少納言は「ただ、秋の月の心を見はべるなり」[22]と答え、「秋の月の心」を具体的には語ろうとせず、定子もまた「さも言ひつべし」と応じている[23]。

これは、まさに言葉を越えたコミュニケーションの成立を示すものであろう。言葉にしなくても、同じ情趣を分かち合える定子との関係を、和歌や漢詩を直接的に介在させることなく語って見せたのが、九六段であった。

定子と清少納言の交流を中心に三巻本『枕草子』の和歌について考えてきた。清少納言にとって和歌は、定子との信頼関係を計る指標の一つであったと言えるのではないか。初宮仕えの頃、定子との心的距離を感じた清少納言も、自らの和歌コンプレックスを定子に告白し、理解を得られるようになった時、和歌は必ずしも定子との信頼関係を「言挙げ」するために必要なものでなくなっていたのではないかと思われるのである。

注

(1)中周子氏にも同類の指摘がある。「三巻本『枕草子』における和歌」(「文化研究」3　樟蔭女子短期大学　平成元年六月)

(2)橋本不美男『王朝和歌史の研究』(笠間書院　昭和四七年)

(3)上野理「清少納言と和歌文学」(『枕草子講座』一巻　有精堂　昭和五〇年)、大洋和俊「枕草子の方法—和歌からの逸脱—」(「国学院雑誌」昭和六一年八月)、藤本宗利「『枕草子』類聚的章段の特質—「木の花は」の方法に即して—」(「国語と国文学」昭和六四年一月)

(4)大洋和俊「清少納言と和歌—枕草子日記的章段の位相—」(「日本文学」昭和六三年五月)

(5)『枕草子』の引用は、三巻本系統第一類本の陽明文庫蔵本を底本とする、新編日本古典文学全集『枕草子』(小学館)により、章段番号も同書による。

(6)清少納言の初宮仕えの年時については、正暦二年(九九一)、三年、四年にわたって諸説ある。正暦五年二月のことを記す章段(二六〇段)に、新参女房としての清少納言自身が語られることなどから、初宮仕えは、正暦四年の冬とする定説に従う。ただし、「浅緑」の薄様が用いられていることなどから、正暦四年の早春説もある。

(7)大洋和俊「枕草子の深層—日記的章段をめぐって—」(「日本文学」平成二年一二月)

(8)小森潔『枕草子　逸脱のまなざし』(笠間書院　平成一〇年)

(9)松田喜好氏は、『枕草子大事典』(勉誠出版　平成一三年)の中で、清少納言の「薄さ濃さ」の和歌を「歌にはそれなりの技巧を凝らしてあり、答歌としては満足な出来栄えであったろう」と指摘している。三田村雅子氏は、『枕草子　表現の論理』(有精堂出版　平成七年)の中で、企みや引っ掛けや嘘や誇張に満ちたソラゴトの「宮仕え生活」を見事に泳ぎ切るためには、それらのコトバを切り返し、もどき、ずらすソラゴトの能力をつけることが何より必要であることを、清少納言は偽りの「くしゃみ」事件から学んだとする。

(10)この歌は、『千載和歌集』巻一六・雑上(九九六)にも皇后宮定子の和歌として採られており、その詞書きには、「一条院御時、皇后宮に清少納言初めて侍りけるころ、三月ばかり二三日まかりいでて侍りけるに、かの宮よりつかはされて侍りける」とある。よって、『枕草子』二八二段は、清少納言が初宮仕えをした正暦四年の三月頃ということになろうか。

(11)ところで、三巻本系統の本文は、「まことにさることなり」であるのに対し、能因本系統の本文には、「まことにさることも」とある。

(12)史実年時については二説ある。この章段の最後に登場する右近内侍が他の章段で『枕草子』の記事年時の比較的後年に登場することから、岸上慎二氏は、これも後年と見る。『清少納言伝記攷』(増補改訂版　新生社　昭和四二年)、清少納言の新参意識の抜け切らぬ正暦五年の夏から秋とするのは、萩谷朴氏、『枕草子解環』(同朋社出版　昭和五七年)である。定子と清少納言の信頼関係に基づく連歌のやり取りが行われていることから、稿者は岸上説を支持する。

(13)「三巻本」におけるこれらの章段を「能因本」の章段と対照してみると次のごとくとなる。なお、「能因本」は、『枕冊子全注釈』田中重太郎(角川書店　昭和五八年三月)の章段番号による。

「三巻本」二二三段→「能因本」二一六段
「三巻本」二二四段→「能因本」にナシ
「三巻本」二二五段→「能因本」二八一段

(14)岸上慎二『枕草子研究(続)』(笠間書院　昭和五八年)

(15)萩谷朴「悲哀の文学」(「国語国文」昭和四〇年一〇月)

(16)田畑千恵子「定子晩年章段の語りと表現」(「国文学」平成八年一月)

(17)針本正行『王朝女流文学の研究』(桜楓社　平成四年)

(18)萩谷朴『枕草子解釈の諸問題』(新典社　平成三年)

(19)田中新一氏は、道隆没後の長徳元年にも短期間ではあるが、定子の職在住が認められることから、その間のこととみなし得るとする。「枕草子『五月の御精進』の段の年次考証」(「国語国文学報」昭和五二年三月)

(20)この場面について、稿者は以前「清少納言と和歌―その詠作意識をめぐって―」(『日本文芸思潮史論叢』ぺりかん社　平成一三年)の中で、清少納言の詠作意識の根底には、「今この瞬間において、同じ時と場を誰かと共有しているという意識」が大きく左右している、ということを述べたことがある。

(21)「三巻本」九六段→「能因本」にナシ

(22)「秋の月の心」については、例えば次のような和歌がある。

いつとても月見ぬ秋はなきものをわきて今夜のめづらしきかな　(後撰集・秋中・三二五・藤原雅正)

月影はおなじひかりの秋の夜をわきて見ゆるは心なりけり　(後撰集・秋中・三二六・よみ人しらず)

また、『白氏文集』巻十二「琵琶行」の一節に典拠を求める見解もある。

曲終収撥当心画　四弦一声如裂帛
東船西舫悄無言　唯見江心秋月白

(23)小森潔氏は、『枕草子　逸脱のまなざし』(笠間書院　平成一〇年)の中で、本章段について次のような指摘をしている。

この場面からは女性が月を見ることについての違和感が残る。『竹取物語』や『源氏物語』の例、また民俗学的考察等から、女性が月を見ることは忌むべき行為であったことが窺える。とすれば、女房としては定子を中に誘うべきなのではないか。しかし、ここでは、両者の逸脱行為と、やはり『白氏文集』「琵琶行」を引用した「ただ秋の月の心を見はべるなり」という清少納言の発言が重ねられているのである。

(さとう・まさよ　山陽学園大学助教授)